創刊
東九通信
2008年4月18日
九州学院同窓会関東支部東京九学会　発行人　緒方昭義

東京九学会会報の発行に当たり

東京九学会会長 S6 緒方昭義

同窓会の事業目標の一つであった「会員の友好を深め、又情報交換の場」ともなるべき東京九学会の情報誌の発行がここ数年、検討されていましたが、この度 尾上（S6）、竹熊（S15）両兄の音頭とりで今般スタートすることになり大変嬉しく思っています。

最近ではパソコンを活用してのホームページ発信が隆盛であり、東京でも既に森浩兄（S8）の尽力での実績はありますが、現況での広範囲への情報伝播を考えると未だに全会員に PC 活用が行きわたっていないのではないか？という判断から発行誌の先輩である関西九学会報も参考に、先ずは初心に戻ってカワラ版的感覚での発行を考えました。

今年は同窓会本部に於て九学創立 100 周年を記念しての会員名簿の発行が予定されていますが前回 1998 年発行の名簿中にある「支部だより」で前会長保良先輩が東京九学会の歴史を述べておられますがそれを今一度ふりかえると、東京九学会の歴史の深さを痛切に感じます。

歴代会長（敬称略）：
初代 原為雄（旧制 5 回）　～’75 年
二代 緒方信一（旧制 9 回）’76 ～’84 年
三代 稲富昭（旧制 30 回）’85 ～’94 年
四代 保良光彦（新制 5 回）’98 ～’00 年
五代 緒方昭義（新制 6 回）’01 ～

以上の歴代の流れの中で劇的なニュースは少子化時代を迎えんとする平成 4 ～ 5 年頃の学校健全経営の一環となる男女共学問題で我々同窓会内では賛否両論が不幸にも二分した時があった訳です。その為に東京での同窓会活動が休眠状態の時期もありましたが、今や OG 諸姉は 14 回生を数えるまでの仲間が集まり、校歌歌詞中の「男子（オノコ）われ・・・」の表現が笑い話になっている等、女性軍の台頭顕著で、関東在住の大学生、社会人は優に 30 数名を数える賑やかさです。

加えて S30 回生以降の卒業生を主体とする若手組織「KG 会」が島本代表（S30）を筆頭に平成 18 年に発足し、関東支部の下支え部門として大いに期待されるところであり、東京熊本県人会でも、九学会の存在はハッピの色合い共々光彩を放つものとなっています。会報発行に多くの OG・OB が参画されますように祈念致します。

東京九学会で出会ったN君のこと

九州学院院長 内村公春

東京九学会に参加させてもらうのは、いつも楽しみです。院長になって 2 年目の会の時、懐かしい顔と出会いました。それは私がテニスを指導していた頃の部員で、授業も教えていた N 君でした。そんな N 君からのうらやましい内容の葉書が、最近も届きました。在学中はテニスも上手く、県で優勝したこともありました。また美術の才能もあり、その勉強もしていたようです。卒業後はデザインの専門学校に進み、その後は自分で表参道に事務所を立ち上げ、何時の間にか読売交響楽団のチラシ、パンフ

やNHKのプロジェクトXなどの番組のパンフなども手がけるまでになっていました。そんなN君の夢は、30年かけて絵を描きながら世界を放浪するというものでした。そして3年前に事務所をたたみ、その夢を実行したのです。

こうして今、N君からの葉書が不定期で送られてきます。もちろん住所は一定していませんから、私から葉書を出すことは不可能です。前回は南米のコロンビアからでした。「強盗に会い。危うく殺されそうになりました」という物騒な内容でした。そして今回、バリ島から送られてきた葉書の内容は、「現在はバリ島の田んぼの中の一軒家で生活しています。庭の池にはアヒルが遊びに来ます。いよいよ『絵描き』スタートです。30年計画。残り27年」というものでした。

彼の描く絵は、どんなことを表現していくのでしょうか。残念ながら暫くは、東京九学会で会えることは出来ませんが、近い将来その作品、そしてN君に出会えることを密かに期待しながら、次の便りを心待ちにしています。

同窓会の意義とあり方

東京九学会幹事長　S20 内空閑裕明

急逝された吉永先輩(S18回)の後を受け幹事長の大役を拝命し早5年が過ぎました。病床からの先輩の電話の涙声に説得された形での拝命でしたが、友人から「忙しいのに大変だな」と言われると必ず「好きでやっているのだから」と答えることにしています。

実際、お受けした事によって優しい先輩方や心強い後輩の諸君との交流が生じ自身の人生が豊かになった気がします。初めて出会う先輩や後輩でも「同窓」という、たった一つの共通点しかないのにすぐに打ち解けて話すことが出来るのは嬉しくもありがたいことだと思うのは私だけでしょうか。私はたまたま役を仰せつかっているから多くの同窓の方との出会いがありますが、この出会いの喜びを同窓の皆さんに味わって貰いたく、日常的な出会いの場所を提供することこそが同窓会の唯一無二の務めだと思っています。

数人の役員や幹事の為ではなく、また年に1回の総会だけの為でもなく、常日頃から同窓の皆さんが交流できるよう願っています。

第14回東京九学会ゴルフコンペ

演劇部森田先輩の新内鑑賞

年に2回のゴルフ同好会主催の「九学ゴルフ会」や演劇部OBによる「観劇会」、生物クラブOB主宰で世界的に著名な上野輝彌先輩（S1回・国立博物館名誉研究員）引率での「江ノ島水族館見学」には子供さんやお孫さんを連れての参加も多く見られました。また、最近では国内外の旅行等にも積極的に参加し先輩後輩の垣根を越えた

交流が見られるようになり、喜ばしく思っています。

江ノ島水族館見学

伊香保へゴルフ・温泉

塩山 はまやらわ 山荘

たとえ先輩後輩の間柄であっても、お酒やゴルフを通じ、また旅行に出かけていくうちに心はやがてプライベートな気持ちになっていくものです。同窓生としての年齢を超えた友情です。その友情の芽を育む苗床こそが同窓会の役割ではないでしょうか。

S6　東京久憎会

東京久憎会幹事 S6 尾上 賢

東京久憎会（とうきょうくにくかい：現在の正会員 32 名）は、九州学院中学校を昭和 26 年に卒業または高等学校を同 29 年に卒業した者、及びこの間一時でも在籍した同期生で構成する久憎会の関東地区部会で、（会則第 1 条、2 条）①会員相互の親睦 ②会員の近況の把握 ③九州学院の発展に寄与する事を目的としています。結成は、高校卒業の翌年の昭和 30 年（1956）神田「キッチンキリン」における第一回会合に遡り（初代幹事：反後尭雄）その後昭和 49 年会長制をしき（初代会長岡田浩二）今平成 20 年度 26 代会長（渡辺芳孝）に至り、この間に会誌「敬天愛人」を 6 回発行しています。（第 5 号は久憎会 45 年記念誌、最近号は平成 16 年 12 月東京久憎会短信です。）日頃の活動も、会の目的に則って極めて活発で、現在の年中行事は全員参加を原則とする企業見学会、セミナー、ハイキング、忘年会を 4 基本イベント（忘年会を除き、夫人を積極的に誘う）とし、このほか、有志同好会として、ゴルフコンペ、囲碁将棋の会、更に 海外旅行を行います。企業見学会は従来会員に関係ある話題の業種の企業を訪問し、飯坂温泉 1 泊の親睦をかね、反後君の飯坂クリーンサイトを見学しました。今年は会員の仕事に関係ありませんが 6 月に大宮の鉄道博物館を予定しています。セミナーもかつては、会員が講師になってその専門分野について啓蒙的レクチャをすることを常としていましたが、今年はこれからの人生のために “妻を亡くして・・・後輩への助言 “というものを 9 月に行う予定です。今年のハイキングは 10 月に高尾山登頂を目指し昼食を ‘うかい鳥山’ で摂ろうという計画です。忘年会は毎年 12 月第一土曜日と決まっており、

校歌斉唱、フレーフレー九学、主の祈りで一年の行事を終えます。囲碁・将棋の会はアマチュアには珍しい高段者を複数名擁し、春秋２回の大会が盛んです。ゴルフコンペも春秋２回です。海外旅行は、1999年緒方君が仕事で関係あったワイナリー、セグラビューダスへ友達を連れて行き、いい目を見せようとスペイン旅行を企画・実行したのが始まりです。以後毎回夫人同伴、総勢20-30名の一行で、第２回2000年イタリア、第３回2002年韓国（九学提携校訪問）、第４回2003年オーストラリア(九学姉妹校訪問)、第５回2005年米国カリフォルニア、第６回2006年ドイツ・スイス、第７回2007年パリ・南仏に行き、今後は催行の方法等検討中です。大勢で毎年行くので、どうしても、誰か行ったことのある国、地域と重なりますが、友達と行けば仕事で行った時とは、景色も空気も違い大変楽しいものです。S6以外の方も参加歓迎です。われわれの年期では、Full timeの勤めは既に、オーナー経営者もそろそろリタイアの時期で、本会がこの先の楽しみ、生甲斐になろうとしています。生涯の友達を得たこと九州学院に感謝。

2007 / 9 /27 ジヴェルニー モネの家の前にて

鎮西肥後あり父祖より享けし
文教輝く歴史を見よや
使命に起ちたる若人われら
九州学院 栄えありここに

九学スピリットは永遠なり

昭和33年卒業 S10　岩崎高紀

私は九学で生まれた。厳密に言えば九学の旧正門の近くにあった職員住宅で産声をあげた。私の家族はいわば『九学一家』だ。父孝は九学の旧制３回（大正７年）の卒業で九学の会計職員として奉職した。長兄拓は旧制28回（昭和18年）卒、次兄国春は新制４回（昭和27年）卒、母校で教職を全うした。そして弟修は新制12回（昭和35年）卒で九学のチャプレンを勤めた。父同様男児は皆九学にお世話になった。九学の同窓生には親子や孫、兄弟が九学卒というケースが多いように思うが、これは建学の精神に共鳴してのことであり、このことにより卒業生から在学生へと建学の精神が受け継がれ良き伝統が築かれてきたとも言える。

さて大きな楠並木に接する職員住宅で幼少年時代をすごした私にとって九学は、単に学び舎であっただけでなく、遊びの場、生活の場でもあった。私の若き日の原風景は、今は無き木造の校舎や図書館、柔剣道場、タイル張りのプール、寄宿舎、そして風雪に耐え文化財として往時の姿を留めている講堂（ブラウン記念教会堂）、ユリや楠の並木、遠景としての阿蘇や立田等の山々である。そしてなによりも瞼に残っているのは、野球や陸上競技等に勤しむ部活動の九学健児達の溌剌とした姿であった。

さる３月１日、私達新制10回卒有志、約50人は、招かれて新制高校第60回卒業式に列席した。９クラス、325人という卒業生の数にも驚いたが、97人の女子がおり、生徒会長の女子が涙ぐみながら答辞を述べたのには隔世の感を禁じえなかった。式後鶴屋百貨店（同期の本田一君が社長）での燦燦会（新制10回）同窓会は、内村院長、椎名先生、松永先生等を囲んで、懐かしい仲間の近況報告やコーラス部の面々の美声の披露もあり、楽しいひとときでもあったし、九学健児健在なりの意気に満ち満ちていた。

翌朝、九学を訪れたら練習中の陸上競技部員が一斉に「お早う御座います。」と元気に挨拶してくれた。校庭には、【自分で自分を監督し、役に立つ善人たれ】の碑が朝日を受けて輝いていた。

げに九学スピリットは永遠なり。

九学健児霊育の・・・

東九通信 Coeditor S15 竹熊 誠

皆さん、東京周辺にお住まいの九学卒業関係者がいったい何人いるとお考えですか。僕には見当もつきませんが、想像以上であることは間違いありません。

この同じ九州学院の「霊育」を受けて育ったわれわれ東京の九学健児（勿論女性も含みます）ですが、もっとお互いに絆を深いものにしたい。これが「東九通信」発刊の発想の原点です。1 年に何度か送られてくる「九学通信」を読めば、九学の現状はわかりますが、卒業生の動向はわかりません。

東京九学会のホームページもできましがアクセスが少なく、開店閉業の状態です。「東九通信」は昔のガリ版新聞を思い起こさせるレトロな代物となりそうですが、付き合いの輪を広げるきっかけになる場となることを期待しています。

まずはこの手作り感覚の新聞から始めて、愛読者が増えたらもう少しグレードアップするなり、ホームページに移行するなりすればよいのではないでしょうか。九学の卒業生が誰でも気軽に近況を投稿できたり、連絡しあったりする受け皿にしたい。そのような「東九通信」作りを目指して、及ばずながら編集のお手伝いをさせて頂くことにしました。皆さんもどうかご協力のほど、お願い致します。

青蕪に歴史の跡のこす 託麻が原の一角に
日毎身をねり文を練る 九学健児霊育の
活ける真清水流れては 絶えずも若き胸にみつ

若手の会「KG会」

KG 会代表 S30 島本 誠

一昨年の春、ボクシングの大会で松岡先生と木庭監督が上京され、数人で会食をしているときでした。S32 回卒の高森君ほか畦間君、本郷君ら強面の面々が次々と現れ「東京方面の OB で若手の会を発足したい」との相談を受けました。「東京に 出てきた後輩達に寂しか思いばさすっとでけんとですよ！」熊本弁丸出しで熱く語る 彼らの母校愛は尋常ではありません。九学で過ごした 3 年間が彼らにとっていかに意義深いものであったかを物語るその熱意と使命感には本当に感心させられました。

第 1 回 KG 会集まり

しかしながら東京には東京九学会という伝統ある OB 会が 存在する事も承知していましたので、そこに敢えて若手の会をつくる必要性があるのかを問いますと「新卒者から 40 代の世代が活性化すれば東京九学会は三世代組織としてさらに充実 することが できるとです。」と高森君の答え。なるほど東京九学会を支えておられる先輩方を思い浮かべますと確かに新卒者にとっては祖父母の世代にあたります。我々 40 代 は父母世 代、そして新卒者が子供世代。祖父母は家族全体に気を配りながら、的確な助言はするけれども細かな事は言わず、父母は祖父母への敬意といたわりの心を示

しながら実践的に子供の世話をしていく、という三世代家族の理想的な役回りを東京九学会の中に反映させたいというわけです。私も九学には中高６年間お世話になりながらこれまでさしたる恩返しもできずにおりましたので、彼らの思いに賛同しお手伝いをさせていただくこととなりました。そしてその秋、緒方会長、内空閑幹事長はじめ諸先輩方より物心両面のサポートをいただき、第一回目の会合を開催し東京九学若手の会「KG 会」を発足するに至りました。

第２回 KG 会

つづいて昨年は春の新卒者歓迎会、秋には全体会と二度の会合を実施。熊本からは内村院長先生、小崎先生、小手川先生、石橋先生、OB ではバスケットの岡山先輩、デザイナーの田山先輩、陸上の末続君、大相撲の平田君（千代錦）、柿内君（千代白鵬）、

池田氏（S37）による KG 会名の揮毫

女子プロゴルファーの有村さんなど多種多様な方面で活躍する卒業生にも参加をいただきました。

OB 会（柔道部）

懐かしい先生方との再会や世間に名を馳せる先輩方との対面は故郷から遠く暮らす卒業生達にとって大変心強い、良きプレゼントとなりました。さて、これからの KG 会はひとつの指針として、新卒者及び学生の歓迎を軸に企画を組み立てていきたいと考えています。これまでの経験により東京九学会の中における KG 会の役割が ある程度明確になった上での回答です。そして学校にとっても 親にとっても安心して子供を東京に出す事ができる、そういった環境作りの一端を僅かでも担う事ができれば何よりです。とは言え、その思いをどう具現化すればよいのか、この秋の会合に向け今日もオカモト印刷の会議室では学生や社会人など様々な世代の九学 OB が顔を揃え、世の更けるのも忘れて 思案を重ねているのです。「KG 会のみんな ~! 高森先輩に怒られんごつガンバロー !」

編集後記 原稿を拝見して、つくづく九州学院は“ほんなこてよか学校だったなー”と思います。巻頭タイトルのバックは昭和 26 年 10 月九学新聞創立 40 周年記念号の 1 面写真を見て図書館を継ぎ足して描いたもの。わが心のふるさとです。やがて 100 周年。その時は本会報もガマだして作りましょう。

編集担当 S6 尾上，S15 竹熊